

坂口禰子の台湾蕃地小説とその系譜 —戦中と戦後を通して—

小笠原 淳

はじめに

- 第1節 坂口禰子の作家生涯
 - 第2節 「時計草」のモデルとモチーフ
 - 第3節 「蕃地」中原での体験と実作との連帯
 - 第4節 「蕃地」に関するノート」の発見
 - 第5節 「樹霊」に見るセデックと日本人の相剋
- 結語

(要約)

坂口禰子（1914～2007年）は、戦中は台湾で、戦後は日本の文壇で筆を執った小説家である。坂口禰子という作家の特色は、戦中戦後を通じた日本統治期台湾への強い関心と台湾「蕃地」を題材とした小説創作に見いだすことができる。本稿は、戦中戦後一貫して台湾を描き続けた坂口の作家生涯を筆者が発掘した新資料を中心に再検討し、彼女の「蕃地小説」の系譜を明らかにしようとするものである。坂口の「蕃地小説」は、「時計草」における霧社事件の後景化から戦後作品における前景化へと移ろうが、その変遷に強い影響を与えたのは戦中の「蕃地」体験であった。坂口は疎開先でセデック族と親交を深め、女達の余話からインスピレーションを受ける。引き揚げ後は、深い罪の意識に苛まれながらも「蕃地」体験を活かして自身の「蕃地」世界を再構築し、「蕃地」を物語っていった。

はじめに

1990年代、外地の日本語文学、旧植民地文学を発掘・再評価する動きが、世界的な脱植民地主義研究と連動して起こった。それは十五年戦争期に帝国主義日本の植民地下で書かれた日本語文学から戦争協力や反植民地というレッテルを取り除き、戦時下創作の空白を埋め、作品の再読をうながす動きであったと概括できるだろう。

坂口禰子（1914～2007年）が1940年代の日本統治期台湾で執筆した作品も、尾崎秀樹の「決戦下の台湾文学」（『文学』岩波書店、1961年）での紹介を経て、1990年代初めには日本統治期台湾文学研究の中でふたたび見いだされ、年譜の作成¹や作品の復刻刊行²と同時進行的に作品研究が進んでいく³。研究者が坂口本人と接触し、取材やインタビューを実施したのもこの時期のことである⁴。21世紀に入り、十五年戦争と文学という視座から、坂口が戦後に執筆した「蕃婦ロポウの話」（『詩と真実』第139号、1960年）が半世紀の歳月を経て『帝国日本と台湾・南方』（集英社、2014年）に収録された。そこからは、坂口の戦後創作から台湾先住民と日本人という、現代人にとってはむしろ新鮮な事象に転化した戦時下の記憶を掬い取ろうとするような意図が汲み取れる。「戦争と文学」のアンソロジーという形態が示すように、ここではおびただしい戦争叙事の一部として、坂口の作品が読み手に提示されている。

坂口禰子文学の研究は日本統治期台湾と戦後が切り離されて、断片的に進行してきた。もっとも、坂口の戦後についてのまとまった論攷はほとんどなく、また戦中と戦後を貫く作品研究も数える程しかない⁵。このことは、戦中は台湾で、戦後は丹羽文雄に私淑して日本の文壇で筆を執り、しかし戦後も小説の題材の多くは依然として日本統治期台湾の「蕃地」⁶や霧社事件に求めた、この作家のある種の特異性に起因しているだろう。台湾研究は坂口の霧社事件に関する叙事に興味を示し、植民地文学研究は坂口の1940年代を中心に研究を蓄積してきた⁷。こうした傾向が坂口の戦中と戦後を截然と分断するような研究状況を作り出したのである。さらに、坂口の戦後の動きについてはまだよく分かっておらず、戦後創作についての論攷の少なさから見ても、坂口の戦後は未だ忘れ去られたままであるといえるだろう。

しかし、今回筆者が発見した新しい資料や未発表作品⁸によって、また自伝資料を精読していく過程において、これまでよく分かっていなかった坂口禰子の作家生涯の全体像が浮き上がってきた。日本統治期台湾での「蕃地」体験を自身の創作に取り込んでいった坂口の作風は、彼女の行動や交友関係と密接に結びついている。それならば、作家生涯の細部を、自伝資料などを用いて掘り下げることで、戦中と戦後をめぐる坂口の創作の変遷を明らかにすることができるのではないだろうか。さらに、未発表小説「樹霊」(1958～59年?)の過渡的な性質からは、彼女の創作過程とその変遷の一端を解き明かすことができるだろう。

本稿はこうした研究動機に基づいて、坂口禰子の戦中と戦後を連続的に捉え直し、半世紀に及んだ彼女の創作の中でも日本統治期台湾での「蕃地」体験から着想された「蕃地小説」の系譜について考察するものである。具体的には、坂口本人の「蕃地」体験と「時計草」(1943年)、「蕃地」(1953年)及び未発表作「樹霊」などの「蕃地」をテーマとした小説の叙事を照らし合わせながら、坂口禰子の「蕃地小説」が生み出されるに至ったいくつかの背景とその変遷を明らかにしていきたい。

第1節 坂口禰子の作家生涯

1. 生誕から引揚げまで(1914～1946年)

坂口禰子は1914年(大正3年)9月30日、熊本南部の小さな城下町・八代に山本慶太郎とマキの次女として生まれた。慶太郎は富農の出身で、八代郡書記を経て政友会を背景に30代で八代町長になり、球磨川改修運動や工場誘致などに辣腕を振るった。マキは熊本の南部芦北の山村上原の農家から山本家に嫁いできた。

坂口は代陽女子尋常高等小学校を卒業後、八代高等女学校で学んだ。慶太郎は『少女倶楽部』を禰子に定期講読させていて、女学校2年時に中條小百合の筆名で応募した掌編「こはれた時計」が同誌の「読者文芸」に掲載されている。同校3年時に台湾で霧社事件が発生すると、蜂起した台湾先住民が「海を渡ってせめてくるかもしれない」と教室で噂合ったという⁹。女学校卒業後は熊本女子師範学校二部(3年制)に進学、卒業後は母校代陽小学校に着任した。1934年12月から熊本の短歌雑誌『龍燈』に参加して、失恋や家族を題材にした短歌131首を詠んでいる。

代陽小学校時代に八代中学教師の板橋源と知り合う。坂口は板橋に恋着し2人の間には恋愛感情が存在したようだが、板橋はほどなく転勤してしまう。1938年4月、失恋の痛手から逃れるように台湾へと渡り、台中州北斗郡北斗尋常小学校で1年生を教えた。ここでの教え子の陳澄子が北斗町前街長の孫だった関係で陳家に寄宿するようになる。そこで坂口は、たとえば陳家に掛けられた「国語の家」の門札や台湾式の墓のなかにあつてひと際目を引く陳前街長の日本式の墓などに強い違和感を覚えたようだ。陳家という「皇民化」の模範家庭で暮らした経験が彼女の皇民化政策に対する懐疑や批判的なまなざしを育てていったようで、1941年に発表した「鄭一家」はこの時の経験や感情を比較的ストレートに表現したものとなった。また北斗小学校時代には、自宅に『龍燈』の台湾支部を設けていた熊本益城出身の坂口貴敏（1912～57年）¹⁰と知り合っている。

1938年9月、郡内の女教師の研修旅行で初めて霧社を訪れた時、一団を霧社公学校の教師下山一（1914～94年）が案内し、同行していた北斗公学校教師の松浦さかゑから日本人警官と台湾先住民の混血である下山の苦勞話を仄聞した（図1）¹¹。その後体調を崩し1939年3月に帰郷。ほどなくして貴敏の妻が急逝すると、1940年4月に貴敏と結婚するためにふたたび渡台し、結婚後1945年4月まで台中市楠町、幸町、後竜子で暮らした。

1940年の渡台直後から『台湾新聞』文芸欄に次々に習作を発表していったが、このことはその後坂口が作家として本格的な執筆活動に入る重要な契機となった¹²。1940年代当時、同紙文芸欄の編集をしていたのは、楊逵との繋がりが強く、台中文化圏で存在感を増していた田中保男であった¹³。『台湾新聞』文芸欄で采配を振り、1935年の『台湾新文学』の創刊に関わるなど田中は豊富な人脈をもっており、特に左派系の日本人作家と『台湾文学』派の本島人作家を繋ぐキーパーソンであった。坂口は田中を中心とした台中文化人のネットワークを活かすことで、創作の機会を発展的に増やしていった。1940年11月、熊本から台湾中部へ渡った農業移民の奮闘と苦悩を描いたラジオ原稿「黒土」（1940年10月）が「台湾放送局十周年記念文芸」の特選となり、詮衡にあたった台北帝大の矢野峰人が総督府の機関誌『台湾時報』の編集者植田富士太郎を紹介、

図1 1938年北斗尋常小学校時代の坂口禰子（右2）
と北斗公学校教師の松浦さかゑ（右3）



（出所）坂口拓史氏提供。

1941年には『台湾時報』に同じく農業移民に題材とした「春秋」（4月）を、9月には「鄭一家」を発表した。1942年2月には張文環や呂赫若ら台湾人作家を中心とする台湾リアリズム志向の『台湾文学』に参加し、霧社研修の際に知った下山一をモデルに「時計草」（『台湾文学』第2巻第1号）を執筆したが、「理蕃政策を批判したという理由」で検閲に触れ、2頁を残して46頁が削除された。同作をもとに再執筆した「時計草」が最初の小説集『鄭一家』（清水書店、1943年）

に収められた¹⁴。

1942年5月、台中市梅ヶ枝町で首陽農園を営んでいたプロレタリア作家楊逵とその妻葉陶と知り合い、以後家族ぐるみでつきあう。太平洋戦争末期、楊逵に「蕃地」への疎開を勧められ¹⁵、母子で埔里郊外の史港に一時滞在した後、1945年4月から翌年1月21日までの約10か月間、セデック族タックダヤ（霧社群）¹⁶の中でも、霧社事件で蜂起に参加しなかったパーラン社を中心とするいわゆる「味方蕃」3社の集団移住地「蕃地」中原（現在の仁愛郷互助村中原）に疎開、中原駐在所脇の教師宿舎に住み、応召した貴敏に代わって中原蕃童教育所の代理教師を勤めた。

中原では、パーラン社の17歳の娘大石フミ（アッパイ・ノーカン）、佐田フミ（テミ・ルピ）、青年ビッキ（名前不明）、川中島の未亡人中西サツキ（バカン・ヌマ）、霧社事件の生き残りであったホーゴ社出身の中山清（ピポ・ワリス）とその妻中山初子（オビン・タダオ）¹⁷、タイヤル出身の原田巡查と川中島から嫁いできた原田巡查の妻（先住民名不明）、日本側の生存者で中原駐在所主任石川一郎警部補とその妻芳子などの人物と知り合う。大石フミは近くの集落から石垣の上の坂口宅に通い、山の生活に不慣れな母子を献身的に助けた。坂口は「大石フミとの出逢いほど私と蕃社の人々とを結びつけたことはなかった」¹⁸と回想するなど、セデックの美女大石フミに強く惹かれ、フミをモデルとした人物を作品にたびたび登場させている。坂口は中原で終戦を迎え、国民党の憲兵と同政府役人による中原接収に立ち会った¹⁹。

2. 戦後（1946～2007年）

坂口は1946年3月に台湾から日本へと引き揚げた。夫と3人の子とともに八代の実家の離れに身を寄せ、1年後に夫の郷里である上益城中砥川の農家に移り住んだ。引き揚げ直後、熊本の同人誌に引揚者の喪失感、疎外などをテーマとする「崩れゆくもの—或引揚者達の対話—」（『無門』第2巻第1号、1947年）他一篇の短編小説を執筆する。その後数年は生活苦のため筆を擱いていたが、1951年頃から「蕃地小説」の構想を練り始め、「蕃地」を題材とした習作に取り組んだ。この頃から丹羽文雄に私淑する。「不貞」など数編の習作を丹羽へ送り、それが評価されて丹羽主催の同人誌『文学者』への参加を勧められたようだ²⁰。

中原での体験を題材にして描いた「ビッキの話」（『文学者』第37号、1953年7月号）が同誌同人の間で好評を呼ぶ。玉名家政高等学校の教師をしていた1953年8月、「蕃地」（『新潮』1953年10月号）で第3回新潮文学賞を受賞した。その後、「遠い火」（『小説新潮』第8巻第1号、1954年）、「蕃地の女—ルピの話—」（『別冊小説新潮』第10巻第10号、1956年）と「蕃地」ものを立て続けに発表して「蕃地作家」と呼ばれるようになる。「ビッキの話」、「蕃地」、書下ろし「霧社」（1953年12月脱稿）を収めた小説集『蕃地』（新潮社、1954年）を上梓し、同書が人口に膾炙する。1955年から『熊本日日新聞』に「スタンド」というエッセイを約1年間連載したほか、熊本放送RKK放送劇団の脚本を担当、「遠い音色」（1958年）などのラジオドラマを執筆している²¹。

1957年2月に夫貴敏が急逝。両親の住む八代市東松江城町に転居し、八代商業高校の教壇に立ち家計を支える。1959年春に熊本市神水町に転居し母子3人で暮らし始める。生活苦から筆

は遅々として進まず創作は低迷していたが、『日本談義』の荒木精之と『詩と真実』の永松定の勧めでふたたび筆を執り、1960年に発表した「蕃婦ロポウの話」が芥川賞候補となった。

1962年2月に次男耕史とともに上京、「猫のいる風景」（『詩と真実』第154号、1962年）、「風葬」（『九州文学』第228号、1964年）でふたたび芥川賞候補に挙げられたが受賞に至らず、次第に中央文芸誌での作品発表の機会を失っていく。生活も困窮し、家政婦として働いたこともあったようだ。1967年から75年まで活け花の雑誌『花泉』に自伝「母の像」を執筆する。1980年代はほとんど発表がなく、1990年代は八代の同人誌『知性と感性』に随筆「ともかくも生きて候」を連載している。1999年に『詩と真実』第600号に掲載された「柿の実は熟るれど——八四才の誕生日に——」が最後の文筆活動となった。2007年2月6日、都内の病院で永眠した。戦後は貧しさに苦しんだが、「したたかな文学魂にあふれ」²²、ねばり強く筆を執り続けた作家の半生であった。

第2節 「時計草」のモデルとモチーフ

前節で見てきたように、坂口禰子は日本統治期台湾と戦後の日本という、終戦により分断された2つの異なる空間で創作し、台日双方に足跡を残した。戦中と戦後という異なる時代性や空間性を一つに縫い合わせるように、坂口が生涯こだわり続けたテーマが、1930年に台湾中部の山地霧社で発生した霧社事件と「蕃地」であった。

霧社事件とは1930年に旧台中州能高郡の霧社で勃発した、セデック族タックダヤ6社（マヘボ社、タロワン社、ホーゴ社、ロードフ社、スーク社、ポアルン社）による対日武装蜂起事件のことである²³。10月27日の早朝、マヘボ社頭目モーナ・ルダオの指令のもとタックダヤ6社の男達約300名は、山間に点在する警察の駐在所を次々と襲った後、能高郡守小笠原敬太郎ら高官が臨席して行われていた霧社公学校の合同運動会場や霧社分室、宿舎などを急襲して日本人134人と台湾人2人を殺害した。この蜂起は日本全土を震撼させ、事態を重く見た当局はただちに警官隊と軍隊総勢約2,600名を霧社へ送り込み、さらには蜂起した6社と敵対関係にあった部族や蜂起に参加しなかった同族までも「味方蕃」として動員して徹底的に鎮圧した。これにより事件以前は1,236人いた6社の先住民は514人にまで半減した。さらに1931年4月25日未明には、「保護蕃収容所」に収容されていた蜂起側の生き残り514人中216人が、当局の扇動によって、タックダヤと敵対していたタウツァの奇襲に遭い殺害された。同年5月6日、蜂起側の最後の生き残り292名は、樺沢警部補以下巡査28名他115名の警察職員による嚴重な警戒のもと北港溪中流右岸の三角州「川中島」（現在の仁愛郷互助村清流）に強制移住させられた。

坂口の「蕃地小説」は、直接間接的に、この霧社事件とその生き残りに題材を求めたものである。第1節ですでに言及したように、坂口が次第に「蕃地」に興味を覚えて、それを題材に小説を書くようになったきっかけは2つある。1つ目は1938年の霧社研修旅行での下山一との出会い、2つ目は戦争末期の中原での「蕃地」体験である。まず本節では1つ目のきっかけとなった下山一という人物と下山がモデルとなった「時計草」について検討したい。

下山一は、霧社の高地にあるマレツパ駐在所の警察官だった下山治平(1886～1952年)とマレツパ総頭目の長女ペッコ・タウレ(1892～1946年、日本名下山龍子)の間に生まれた長子である。下山治平とペッコ・タウレの婚姻は、タイヤル族の懐柔と統治のために理蕃課の命を受けておこなわれた政略結婚だった。治平は1925年にペッコ・タウレとの間にもうけた三男三女を霧社に残したまま内地の許嫁とともに静岡に帰郷、ペッコ・タウレ一家は霧社に留まり日本人として暮らし続けた。下山一は1932年に台中師範学校を卒業し、霧社公学校に勤務する。1936年夏、下山一は父の招きで初めて内地を訪れ、静岡三島で父が準備した7人の娘と見合いし、最後の1人の藤原正枝と婚礼をあげて霧社へ戻った。しかし正枝は「紋面」(タイヤル族が顔に入れた刺青)のある義母を蔑み、ペッコ・タウレを家から追い出してしまったという。翌年、正枝は一時帰郷したまま二度と霧社へは戻らずこの婚姻は破綻する。1939年、霧社小学校時代の幼馴染であった井上文枝との結婚を決意した下山一はふたたび内地へ赴き、挙式を終えて文枝を霧社へ連れ帰る。終戦後も下山一家は台湾で暮らし続けた²⁴。

以上が下山一の略歴だが、これと照らし合わせると、坂口が下山一と会った1938年は、下山一と正枝との結婚が破綻したほぼ直後で、かつ下山一が文枝と結婚する1年前だったことがわかる。坂口は1938年当時の下山一の印象を次のように記している。

松浦さんは、しばらくお姉さんの部屋にいていたが、帰ってくると、窓辺にぼんやり座っていた私に話してくれるのだった。……

「もう一人の若い方の話だけだね。下山先生とおっしゃるそうよ。事件の前に霧社を下りていかれた下山さんという警部補の息子さんで、お母さんが、山の娘さん。蕃婦ということ。それで、内地からお嫁さんをつれてくるのだけど、何度も逃げられるんですって。とてもやさしいよい先生なのに、どうしてもお嫁さんが辛抱しないのね。」

私は、漠然と、下山先生の面影を追いながら、気の毒なひとというものは、複雑なものだ、と考えたりした²⁵。

坂口は「時計草」(『鄭一家』、1943年)で、M(霧社)の公学校に勤務する師範学校卒のエリート・山川純を登場させる。純は、「蕃地」駐在所の日本人警官山川玄太郎と「高砂族」の母テワスルダオの間に生まれた混血児である。父玄太郎は霧社事件の発生以前に母子を棄てて台湾を離れ、内地で新たな家庭を築いている。父の言いつけに従い、純は内地の花嫁を霧社に連れ帰るが、内地の娘たちは純の母が「高砂族」であるのを知るとたちまち逃げ帰ってしまう。

下山一の略歴が示すように、この山川純という人物の形象は、下山一の出生に完全に倣って創られたものである。これこそが坂口の「蕃地小説」の原点であった。坂口は「時計草」の創作で「蕃地」という新たな領域に踏み込んだが、物語の舞台や人物モデルは自身の故郷と家族を中心とするそれまでの私小説的な作風を踏襲している。実際に霧社が描かれるのは小説の冒頭だけであり、舞台は終始八代に置かれ、山川家は山本家がモデルとされている。たとえば、玄太郎のモデルは、「蕃地」の警官だったという要素を除けば山本慶太郎の出自そのものである。

坂口は1930年代の熊本時代から結婚のために渡台した1940年代の初めまで、自身の生い立ちと故郷、家族を題材としてきわめて私小説的な作品を書いてきた。渡台直後の1940年代初期の作品には特にその傾向が顕著である。たとえば、「霧」（『台湾新聞』1940年11月）は、ヴァイオリニストの朝川が徴兵時の事故で音感を失うという内容の短編小説だが、このなかの語り手「私」は唐突に、坂口の父慶太郎をモデルにした町の有力者のエピソードを挟み込む。「破壊」（『台湾新聞』1940年12月）の主人公櫻子は結婚を拒むことによって、「祖母の身内を流れている（狂人の）血」と淫乱な「父の血」に対する抵抗を続けている。「母の像」（八）（『花泉』1968年7月号）によって、この小説の内容も山本家の実話に基づいていることがわかる。やはりこの時期に『台湾新聞』に発表されたと考えられる「母の手紙」（『曙光』に収録。初出不明）は、文盲の母マサが出征する長男武のために街頭で千人針を請い、武に手紙を出すために字の稽古をして、出征先の武にわずかに漢字が混じった手紙をしたためるという話。これもやはり坂口の兄稔の召集をめぐる実際のエピソードだった（「母の像」二部、『花泉』1970年2月号）。

坂口がこの私小説的作風を突破したのが、1941年の「鄭一家」であった。しかしその翌年に書かれた「時計草」ではふたたび以前の作風に後戻りするように、物語の舞台が自身の故郷に設定されている。その一方で、霧社のタイヤル族女性と日本人警部補の間に生まれた混血児が、歴史的宿命の中であって、どのような人物と結婚しどのようなアイデンティティで生きていくのか、というテーマは、坂口の初期作には見ることができない新しい創作傾向をもっている。さらに、坂口が「破壊」や「鄭一家」でも執着した血統の純潔という優生学的な問題意識が、『時計草』中の純や玄太郎、錦子の観念的な思索の中で展開されていることも特筆すべき点である²⁶。しかし残念なことに、「時計草」では純と錦子が結婚に際して行き当たった煩悶と葛藤、その結果ようやくたどり着いたタイヤル族としての自我は、「帝の命のままに」前進するという皇威発揚の精神に集約されてしまうのである。当時の台湾が国家総動員法の適用と極端な皇民化政策のただなかにあったことを加味すれば、一部に見られる坂口のこうした戦争協力の筆致は、彼女が「灯」（『台湾文学』第3巻第2号、1943年）のラストでも見せたような検閲を通すためのカムフラージュだったとも考えられるが、しかしいざれにしても坂口は、「時計草」でところどころに「理蕃政策」への懐疑をにおわせながらも、大筋においては「蕃通」の父玄太郎を肯定的に描ききることで、日本当局の「理蕃史上」の「功績」を肯定する立場をとっている。

霧社事件についていえば、事件は木材運搬の苦役が原因ではなく、内地人警官と頭目の娘の政略結婚と破局にその原因があったと玄太郎に告白させている以外に目立った記述はない。「時計草」は、まだ蕃地を知らない令子の、旅人としての1日にかいま見た霧社事件だった²⁷と自身も自伝に記しているように、彼女が「時計草」で霧社や霧社事件をほとんど書かなかったのは、敢えて忌避したからではなく、事件や「蕃地」のことをまだよく理解していなかったためだと考えられる。逆にいえば、坂口は物語の主要な舞台を「蕃地」ではなく自身が熟知する故郷に設定するほかに、自身の父慶太郎をモデルに純の父を形象化するほかなかったのであろう。

第3節 「蕃地」中原での体験と実作との連帯

本節では、坂口が「蕃地」を創作する2つ目のきっかけとなった「蕃地」中原での体験と実作との連帯について論じたい。坂口は1946年に台湾から故郷八代に引き揚げた後、1950年代から本格的に「蕃地小説」の執筆に向かうが、その創作源となったのは1945年の約10ヵ月におよぶ「蕃地」中原での生活体験であった。河原功は、坂口にとって「中原での生活体験は彼女の作家活動の大きな原動力となっており、作品はその体験を基盤にした私小説の色彩の濃いものとなってくる。そこに彼女は、自分の創作領域を見出したのだった」²⁸と指摘する。坂口自身も「私が霧社事件に関係のある、タイヤル族霧社蕃の人々について、語ることができるのは、一九四五年四月から、一九四六年一月まで十か月間、彼らの住む移住蕃社中原に暮らしたからである」²⁹という内容のことを繰り返して述べているように、中原での体験は坂口の戦後創作に決定的な影響をおよぼした。

中原は、当局が万大ダム建設による耕地の水没を口実に、霧社のパーランを中心とするタカナン、カック3社の先住民147戸661人を強制移住させた北港溪南岸の新しい「蕃社」で、北港溪北岸の川中島社と東の眉原社の間に位置する。パーラン3社は霧社群でありながら、対日蜂起した同族の鎮圧に駆り出された「味方蕃」であった。1939年6月に移住が開始され1940年初めに完成、狭い山裾に旧パーラン社の部落単位に階段状に家々が配置され、「蕃社」を見下ろす石垣を組んだ高台の上に警察駐在所、中原蕃童教育所、教員宿舎、衛生所が設置された³⁰。

中原社が成立したことで、隣り合う川中島、中原、眉原の住民たちは互いの社を頻繁に往来するようになっていく。特に中原と川中島の先住民は同じセデック族タックダヤであり、かつ事件で生き残った川中島の住民のほとんどは、女性と子供、老人だったことから、中原成立後に両社間で縁組する者が少なくなかった。たとえば、イヨン・ピホ（日本名松山義夫）などのように中原で出生後に川中島の老夫婦の養子となるケースや、カクン・ヌマ（日本名不明、中国名銭羅）のように川中島に婿入りするケースは珍しくなかった³¹。こうした中原と川中島の新たな関係を、坂口も感じ取っていたようで、中原の住民が「川中島から嫁をもらい婿にいつている。反抗蕃・味方蕃の対立は消えているようにみえた。底流に何があるかは、私には見えないだけかもしれないが」と記している³²。さらに坂口自身も食料品集めという目的もかねて、川中島と眉原に遠足のように出かけていったという³³。このように坂口は中原を拠点として、川中島や眉原にまで足を伸ばして多くの先住民と交流をもった。坂口と先住民との交流が、少なくとも彼女自身の実感としては「個人対個人の交りに、私共は信をおいていた」³⁴というほどの固い親交を結んでいたという点、そして「蕃社の粗末な家に、蕃布を敷いて寝んだ夜の、私の深い信頼は、今も私のなかに流れ、決して幸せではないだろう、蕃地の人達に、うずくような共感を感じる」³⁵という信頼と共感を彼女たちに抱いていたという点は、特に注目に値するだろう。坂口は中原での体験を次のように回想している。

私は、中原で多くのタイヤル人を識った。タイヤルを識るにしたがって、私は、霧社事件に興味をもった。しかし、彼らと私とでは、彼らがおぼつかなく語る、日本語だけが通じあうことばで、しかも彼らには、まとまった何かを順を追って話すということではできなかった。最新の教育をうけ、教育所の教育担当であった、タイヤルの巡査さえ、私に、何かを語ってくれる、ということではできなかったのだ。私は、唯、彼らを皮膚で感じるだけだった。……事件をひきおこすには、それだけの必然がなければならず、ではその必然を、どう発見すればよいのか。私には、十か月間の蕃地生活がある。それをたよりに、タイヤルを描き、帰納的に発見する他に方途はない³⁶。

坂口が戦後に執筆した「蕃地小説」は、ほぼすべてがこの中原生活での実体験に根付いたものとなった。とはいっても、川中島から中原に移住してきた「生き残り」や川中島の「生き残り」たちが積極的に霧社事件のことを語って聞かせるということではなかった。日本側の粛清により、彼らはそれを口外できない状況にあったのである。

1931年5月の川中島への強制移住後、日本の警官は生存者の中から蜂起に参加した疑いのある者を「蕃社」内の密告によって割り出し、帰順式の名目で埔里に連れ出して逮捕した。逮捕・監禁された数十名の川中島の男たちはみな獄死したと伝えられ、二度と帰ってくることはなかった³⁷。また、坂口が愛した大石フミの父ウカン・ナウイも、中原移住に反対したことを理由に逮捕されて獄死している³⁸。事件後に行われたこうした日本当局の粛清が生き残ったセデックたちに疑心暗鬼を生じさせ、口を嚙ませたのである。粛清の後、「生き残ったセデックたちは決して『霧社事件』に関連することを話さなかった。『霧社事件を語る』ことは厳粛な川中島社の新しいタブー（baniq bnarah）となり、誰も訊ねてはならず語ってはならなかった。川中島の『白色テロ』だと言う人もいる」³⁹。

これでは坂口が霧社事件について何か訊ねても、唯唯諾諾として口を開くものなどいなかったはずである。しかし坂口は、すでに事件に興味をもちはじめていたようで、中原や川中島の親しいセデックの友人に事件のことをそれとなく訊ねていた形跡が回想録の端端からうかがえる。坂口は当時事件の首謀者の1人とされていた警手花岡二郎（ダッキス・ナウイ）の妻であった中山初子（オビン・タダオ）の口から霧社事件の証言が得られることに期待を抱いていたに違いない。

中山一家は坂口の宿舎の隣の診療所で暮らしており⁴⁰、坂口は食事をともにしたり雑談をしたりと初子と親しく付き合っている。そうしたなかで事件のことが話題にあがったのだろう、事件当時は台中の病院で看護婦の研修をしていたという初子は坂口に、「院長先生から事件のことを聞かされて、あたしは泣きました。すぐ埔里まで帰ってきましたが、もう警備線ができていて、どうしても先に行かせてくれんです。二郎のことも家のことも心配で心配で、わアわア泣いたのんですが、ゆるしてくれんです」⁴¹と語っている。

しかし初子は事件勃発当時は霧社におり、発生直後に運動会場へ向かい、その後夫花岡二郎や一郎家族に合流して行動をともにしていた。初子はホーゴ社下方にある小山の中で二郎とともに自害するつもりでいたが、二郎に「生きられるだけ生き残って見て運命にまかすがよい」と諭さ

れる。その後初子は伯母オピン・ノーカンらとともに二郎の元を離れ、パーラン社のワリス・テワスの宅に避難しているところを石川源六巡査によって保護された⁴²。昭和5年11月7日付の『大阪朝日新聞』の記事は、初子は6日午前10時ごろ「パーラン社に逃げ隠れしているところを石川巡査のため逮捕され」と報道している。

初子は当時隣人の坂口にも真実を口外しておらず、霧社事件を語ることがタブーであった当時の状況を垣間見ることができる。川中島から中原に移ってきた中山夫妻は当局の粛清を心底恐れていた。坂口自身も川中島と中原の先住民たちは、「どちらも、霧社事件のことについては、語ろうとしなかった」⁴³と書き残しているように、彼女は中原在住時には霧社事件発生の背景や経緯、人物関係などの詳しい知識を得ることができない状況にあった。坂口が霧社事件の全体像を掴んでいくのはむしろ引揚げ後のことだったのである。

その一方で、事件の生き残りが何かの拍子にふと漏らすこぼれ話程度の短いエピソードは、坂口に強いインスピレーションを与えていたようだ。たとえば、川中島から中原に嫁いできていたタイヤルの原田巡査の夫人は、坂口が出産祝いに祝品をもって行った時、「運動会をみにいってたら、お母さんが走ってきてかかえて逃げるので、何かと思いました。首を切る音は、洗濯物を棒で叩くような音ですね……こわかったです」⁴⁴と坂口に語っている。また、坂口と親交の深かった川中島の中西サツキ(バカン・ヌマ)は、坂口に教育所5年生の息子のことで相談に乗ってもらっている時などに、蜂起に加わり銃弾に倒れた夫が、足にすがりついて引きとめた自分を振り切つて闘いに加わっていった様子を語ったことがあったようだ⁴⁵。中西はまた、坂口が川中島の中西の自宅に泊まりに行った際に、「うちのひとは、マヘボ岩窟までいきていたです」と語った⁴⁶。

『清流部落生命史』(2002年)から、川中島社59号に住む「中西^{ママ}サツキ」という人物は確かに存在し、その夫であるシレ・ナウイは霧社事件で命を落とし、当時シレの遺児タド・シレ(日本名中西正弘)が中原教育所に通っていたことがわかる。また、日本側の生存者であった中原駐在所主任の石川警部補の夫人も、坂口に対して「桜台で、背中の赤ん坊ごと蕃刀で切られ、命びろいをした」、「目の前で、上の子供が、机の上にのせられて叩き切られるのを見た」と当時の惨状を漏らしたことがあったようだ⁴⁷。

坂口のこの回顧に基づいて「石川」という人物を調べてみると、それは霧社の巡査時代に遭難した石川一郎とその夫人であったことがわかる。総督府警務局が編纂した『霧社事件誌』の「遭難者一覧」によれば、石川巡査の夫人石川芳子は確かに事件で重傷を負っており、また彼らの幼子2人は事件で死亡している⁴⁸。こうした史料と突き合わせると、坂口の中原をめぐる回顧録がかなり正確であることがわかる。そしてここからもう1つ明らかになってくるのは、坂口は蜂起側の先住民女性からだけではなく、石川芳子のような日本人の事件遭難者からも事件の話聞き出していたということであろう。霧社事件を経験したこれらの女性たちはいずれも坂口と懇意な間柄で、彼女に対して信頼を置いていたであろうことは想像に難くない。坂口は中原や川中島の女達と信頼関係を築き、その結果としてもたらされた女たちの余話を掻き集め、デフォルメして物語に取り込んでいったのである。

それでは具体的に、これらの見聞がどのように戦後の「蕃地小説」に活かされていったのかを

見てみよう。坂口は戦後の日本でデビューするきっかけをつくった「ビッキの話」で、初めて中原に住むセデック族タックダヤの人間模様を描いた。ここでは中原が物語の舞台であり、彼女が中原で出会った実在の人物が物語の中心に据えられている。パーラン社から移住してきた足の不自由な孤児「ビッキ」は主人公「ビッキ」として、大石フミの母親はビッキと肉体関係を結ぶ「ブネ」として、大石フミはブネの娘の「スミ」として、中原にやって来た早稲田出身の中原警備隊長前野は同様の人物「前野」としてなど、それぞれ実在の人物をモデルに造型し、デフォルメして、物語が構築されている。

坂口は、「初めて、ビッキを見た日の驚きを、令子は今も鮮らしくもっている」⁴⁹という鮮烈な印象やビッキの「端正にととのった顔、色白の頬はうす紅にそまり、ひきしめた唇」⁵⁰を作品の中で、「彼の容貌は、この地方で一番美しく整っていた。漆黒の髪はよく手入れが届き、蒼白な程の顔は、何かに感動すると、サッと紅潮する」⁵¹と表現する。

「私は「ビッキの話」で、前野隊長と、私の愛する美女フミさんと、けなげに一人で生きている足萎えの青年、『ビッキ』とよばれていた男とをからませて創った。全くの私の『つくり話』、でたらめだった」⁵²と語っているように、こうした人物の造型と虚実を混淆させた物語構築は、その後次々に書かれていく坂口の「蕃地小説」における小説作法となるのである。

次作「蕃地」でもこの手法が用いられている。「蕃地」は「時計草」と同様に下山一の結婚にまつわるエピソードが物語の冒頭に置かれている。しかし八代が舞台であった「時計草」とは異なり、「蕃地」では終始霧社を舞台に物語が展開されていく。したがって、「蕃地」では自ずと霧社事件が前景化され、事件と人物やプロットとが必然的に結び付けられて描かれるのである。「時計草」と比べて登場人物が格段に増えて、タックダヤの複雑な人間模様が活写されるようになったことも、彼女の「蕃地小説」に深みと奥行きが加わった要因の1つだろう。このようにして、坂口の「蕃地小説」は次第に真実味を帯びていく。

坂口は小説「蕃地」でもパーラン社の「美女フミ」を登場させ、前野をモデルにした「士官候補生牧」との悲恋を挿話している。坂口が好んで用いたセデックの美女と日本のエリート青年との関係は、全くの作り話ではなく、前野に思いを寄せる大石フミの姿を情愛にまで昇華させたものようだ。実話をもとにして話を再構築するこのような創作法のほかに、坂口は現実の対話を作品中にそのまま取り込んでいく手法を用いている。現実の対話と作品「蕃地」を併置すると次のようになる。

或る日、彼女は興奮してやって来た。「奥さん。二郎が生きているよ。埔里へ来た支那の将校のなかに二郎がいるそうよ。」初子はそのことがうれしいのかこわいのか、私にはのぞけなかった。「だって、あなたは花岡山の自殺現場へゆき、二郎さんの死体をちゃんと見たんでしょ?」「見ましたよ。」「埋めてお墓をつくったんでしょ?」「お葬式をしたよ。」「それでいて、どうして二郎さんが支那の将校になって戻って来た、と考えるの?わからないわア。」「でも何人も見たというよ。」⁵³

「先生。二郎が生きていると言うんです。パーラン社の人が、埔里で逢ったと言うのです。中国の軍隊と一緒に来ているそうです。」

「馬鹿な。貴女は、二郎君が死んだのをみているじゃあ、ありませんか。」

「でも、そう言うのです。」

「貴女は、死體を確かめた筈でしょう。」

「私、自分で死體を焼きました。」

「それで、何を言い出すのです。自分の目を信じなさい。デマですよ。」⁵⁴

この段落の比較から、終戦直後の中原で作者と初子の間で交わされた言葉がそのまま、主人公純と初子の対話に置き換えられて、小説「蕃地」の中に取り込まれていったことが看取される。

坂口の戦後の代表作「蕃婦ロボウの話」は、霧社事件の首謀者の腹心だった夫ノーカンを事件で亡くしたマヘボ社の「蕃婦ロボウ」ら最後の生き残りが、日本の警官に護衛されて川中島へ強制移住させられていく話である。この物語の妙は、中原の「蕃婦」ハツエのユーモラスな語りによって、ロボウの話が物語られていくところにある。疎開先の中原で終戦を迎えた「私」は、粟酒で「蕃婦」ハツエのご機嫌をうかがいつつ、「蕃婦ロボウ」の話聞き出していく。ロボウは霧社事件後に集団収容されている時、夫ノーカンによく似た日本人警官片山に「魔法にかけられたようにおのれを忘れはて」⁵⁵ 惹かれてゆき、遂に枕を交わす。しかし事件の翌年に実施された「収容蕃」の川中島への強制移住の道すがら、ロボウは片山を道連れにして谷底へ身投げをしてしまう。ロボウは日本への復讐と片山への恋情とのほざまで苦悩し、心中という行動にでたのだった。

小説の語り方にも一工夫ある。坂口は、前述した川中島の未亡人中西サツキという「ごく地味で、親切な小母さんタイプの女性」⁵⁶ を、「一体ハツエは人間なのか、狐狸のたぐいではなかるうか」⁵⁷ というほど野性味のある語り部「ハツエ」に仕立て、サツキのたどたどしい「国語読本にあるコトバ」を独自の方言にアレンジしてユーモラスに描き出している⁵⁸。

このように、坂口は中原と川中島での自身の「蕃地生活」とそこで出会った人々、そして「蕃地」で見聞き、皮膚で感じた様々な事象を余すところなく創作に取り込みながら、「蕃地小説」を執筆していった。中原と川中島でのこうした体験と見聞が、彼女が戦後に取り組んだ「蕃地小説」の重要な創作源だったのである。

このように、坂口は疎開先で知り合った実在の人物・体験・余話を戦後の日本で再構築して、虚実を混淆させながら「蕃地の物語」を創作していったのである。1946年3月の引き揚げから1953年に「ピッキの話」を発表するまでに要した7年という歳月は、坂口が自身の「蕃地」体験を物語として異化するために必要な時間だった。こうした異化によってもたらされたのは、作者から独立した1つの虚構の小説であったし、坂口自身も「小説の本質は虚構だ」という一貫した考えをもって創作に取り組んでいた⁵⁹。注意しなければならないのは、坂口の「蕃地小説」は事実やモデルになる人物をもつが、それは「素材—事実として一度全く燃焼」⁶⁰ しつくす手法によって、自伝小説や実話小説とは異なるフィクションへと昇華している点だろう。坂口は「蕃地小説」で「虚構の上にとった真実」を追求した。読む側もまた坂口の「蕃地」ものを、「台湾

蕃地の真相」（『蕃地』の帯に書かれたキャッチコピー）を覗き見るような好奇心をもって読み進めながらも、やはり「小説」^{フィクション}として受容してきたのである。

第4節 「蕃地」に関するノート」の発見

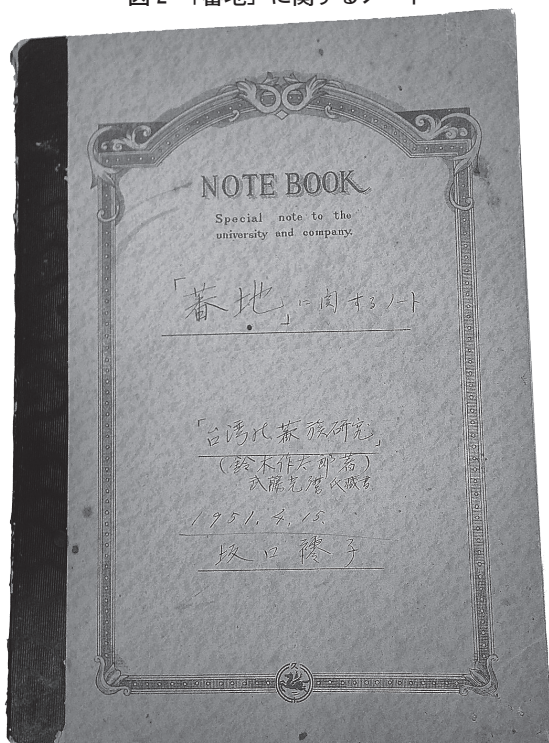
本節では第3節とも関連する2つの問題を考察したい。1つ目は、坂口は中原生活中に霧社事件に関する断片的な情報しか得ることができなかつたにもかかわらず、「ピッキの話」、「蕃地」以降の作品で霧社事件における複雑な人物関係や史実を比較的全体的に把握して、霧社を前景化し得たのはなぜか、2つ目は、坂口は具体的に戦後のどの段階で「蕃地小説」を着想したのか、という問題である。

ここで筆者が今回発見した坂口の創作ノート「蕃地」に関するノート——台湾乃蕃族研究（鈴木作太郎著）1951.4.15. 坂口禰子⁶¹（図2を参照）に注目したい。坂口は1951年4月15日から書き始めた「蕃地」に関するノートで、計15頁にわたり霧社事件の人物関係を中心に比較的詳しい創作ノートをとっていたことが判明した。第2頁を見ると近藤儀三郎とモーナ・ルダオの妹テラス・ルダオの結婚が詳述されている。儀三郎が「テラスを知人にあずけた」後に行方不明になって破局に至るプロセスや、未亡人となったテラスが「現金二百円」や「恩給証書」をもらっ

てモーナ・ルダオのところへ帰り、「蕃丁との結婚」、「材木運搬の指揮」、「◎男のように働いた」ことなどがまとめられている。調べてみると、この記述は、鈴木作太郎『台湾乃蕃族研究』（台湾史籍刊行会、1932年）中の霧社事件「蕃婦関係」の節（452-455頁）に基づいたもので、特筆すべきは、ここでまとめられている内容は、「蕃婦ロボウの話」の一部に次のような形で挿話されているということである。

ワリスは某の恩給証書と一時金ももらってマヘボにかえてきたが性格が一変した。おとなしいだけの女だったが、それからは酒は飲むし、生タバコをかじるし、霧社分署で材木運搬の監督兼通訳を募集すると、まっ先に応じて男達を指揮しながら、材木をさくら台へはこびあげた⁶²。

図2 「蕃地」に関するノート



（出所） 著者撮影。

この段落からは、モーナの妹ワリスが近藤に捨てられたことで性格が一変していく様が、ノートでまとめられた内容をもとに表現されていることが確認できる。そのほかにも、「花岡一郎と妻ハツエ」、マレツパ社の「下山一家系図」、「佐塚警部」、「プロテストに関する例」、「ピポサッポ」、「ピポワリス」などの項目が立てられ、各人物の経歴や婚姻関係などが比較的詳しく記されている。ここに記されている人物や事象は、その後の坂口の「蕃地小説」で時に中心的なテーマとして、時にサブプロットとして、重要な役割を担うものばかりである。

さらに注目に値するのは、モーナ・ルダオ、テウス・ルダオ、ピポ・サッポ、花岡一郎、下山治平、佐塚愛祐という霧社事件の重要人物たちが一列に並べられ、各人の特徴や性格が比較されるように記されている個所であろう⁶³。下山一の父治平の所を見ると、「狡猾」、「サクシュ」、「金銭慾」、「冷酷」、「苦惱（自我）息子の結婚」と書かれている。このノートに記されている下山治平に対するマイナス面の認識を反映するように、小説「蕃地」では下山治平をモデルとした林田壮吉が、「あらゆるものを立身出世の道具にしてはばからぬ父親の逞しさに、復讐することを考える。父親が代行している理蕃課の意志を踏みにじる痛快さを想像する」⁶⁴ というように否定的な形象として描かれている。「時計草」で見られた父玄太郎と理蕃政策を肯定する描き方から、小説「蕃地」における父の否定、「理蕃政策」への懐疑、父壮吉の血を半分受け継いだ混血児林田純の日本人アイデンティティに対する懐疑、というおおよそ180度の認識の転換が図られていることが読み取れる。そして「蕃地」のラストでは、林田純のタイヤル族としてのアイデンティティが、日本人の警官の宿舎へ向かう道ではなく、母の里の「蕃社」へ向かう道を優先して選んだ純の歩みによって、より明確に提示されるのである。

この「「蕃地」に関するノート」から、坂口が1951年頃から鈴木作太郎の『台湾乃蕃族研究』から霧社事件に関する人物関係や事象を改めて学んでノートに整理し直し、1955年からの「蕃地小説」の執筆に繋げていった創作過程の一端が浮かび上がってくる。戦後の坂口の「蕃地小説」は、この1冊のノートを中心に着想されたといっても過言ではないだろう。

第5節 「樹霊」に見るセデックと日本人の相剋

本節では、坂口が1958年から1959年の間に執筆したと考えられる未発表作「樹霊」⁶⁵について論じたい。「蕃地」で新潮賞を受賞した後、「二十八年に受賞して以来、新潮、小説新潮、文芸に、十数編の小説を発表したが、新潮に“鴨猟”小説新潮に“蕃地の女”を書いて以来、休止。習慣的に年に一、二篇の小説を、新潮社に買っていただくまでに落ハクした」⁶⁶ というように、新潮賞以後、坂口の創作はふるわなかった。「蕃地の女——ルピの話」（1956年）の後、1960年に「蕃婦ロポウの話」を発表するまで生活に足をさらわれて書けない時期が続いたからだ⁶⁷。しかしながら、「まだ、過去帳にくりこまれるには、ファイトも若さ失っていないつもりだ」⁶⁸と気を吐いていることからわかるように、坂口は小説創作への情熱をいささかも失ってはならず、実際彼女は模索を続けた結果、「蕃婦ロポウの話」で新たな境地を拓いて見せたのである。

未発表作「樹霊」は、このいわば「落ハクの時代」に執筆されたものだと考えられ、「蕃婦ロ

ポウの話」が描かれていくまでの移行期における坂口の「蕃地」創作の過渡的性質を如実に表す作品である。

「樹霊」で描かれるのは、霧社事件が発生した1930年10月27日から1932年10月までであるが、入れ子型の物語構造が採られているため、「烏丸巡査が、蕃地勤務を命じられて、赴任したのは、昭和七年十月末のことで、霧社事件からまる二年たった」というように、1932年10月の時制から語り始められる。その後語り手は霧社事件の経緯を説明し、最終的に生き残った「収容蕃」の川中島への強制移住に話を移していく。ここまでが物語の導入だと考えていいだろう。そして物語の前半は、「蕃婦ロポウの話」の題材としても用いられた「収容蕃」の強制移住を中心とする「事件とその後」の話となる。蜂起側の生き残った移住者たちは「他蕃社からの襲撃と、はたして、安全な土地へ移すという、日本側の言が真実であるかどうか」⁶⁹という二重の不安におののきながら、「はだして、そうした恐怖と不安に、ノドのふさがる思いをしながら、彼等は歩いていった」⁷⁰。そのような不安と恐怖に駆られた中年の「蕃婦」が、衝動的に、警衛のために同行していた日本人の加納巡査を北港溪の溪谷に突き落としてしまう。川中島へ到着後、石川警部は中年の「蕃婦」に対して、加納巡査を突き落とした「わけ」を問い詰めようとするが、中年の「蕃婦」は、「わけ？ オレ、わけなんてないんでや。オレ、わからんでや。……その人も、その人でねえもんも、おそろしかったでや。うん。」⁷¹と答えるばかりである。彼女のいう「その人」というのは加納巡査であり、「その人でねえもん」とは加納以外の全ての日本人警官を指しているだろう。

このような先住民女性のたどたどしい言説を通じて、生き残ったセデック族の Tanah Tunux（タナトゥヌ。セデック語で日本人）に対する畏怖と猜疑、そして嫌悪が表現されている。また、このような「樹霊」のプロット、すなわち川中島への集団移住中に日本人警官を北港溪の谷底に突き落とすというプロットからは、「蕃婦ロポウの話」の原型を見ることができるだろう。さらに先に引用した中年の「蕃婦」の方言を使った「樹霊」の語りに注目してみると、それが「蕃婦ロポウの話」におけるハツエのユーモラスな語りに通じる「語り」であることに気づかされる。

「樹霊」の後半は、物語の冒頭に登場した烏丸巡査の生い立ちから語り始められる。烏丸は八代の貧しい家に生まれ、縁戚の老夫婦が営む雑貨屋の店員として酷使される日々のなかで、「蕃地で、十年間がんばれば、内地で三十年つとめたのと、ほぼ同じになる。退職金ももらえる。恩給をとって、退職金で一寸した商売をしていけば、夫婦に子供二人位の口は養えるだろう」⁷²と台湾の「蕃地」勤務に唯一の希望を見出し、また、新しい運命を開拓しようと台湾「蕃地」に渡った。ここで語りは、冒頭の1932年10月末の時制へと戻っていく。霧社事件から丸2年たった1932年10月末、こうして内地から霧社の「蕃地」に赴任してきた烏丸巡査は、霧社に到着後、道案内のワリスに連れられて2人で駐在先のマレツパ社へ向かうが、その途中の深い森の中で、烏丸の目に「霧社事件にたおれた、数百人の靈魂が、密林の樹木の間に見えかくれする」⁷³ようになる。烏丸は、「樹木は、蕃人の呪いを吸って生きていたのか。樹木は、蕃人の現身であるのか。楠は、タイヤル族の男の血を吸ったか。蛇木は、いれずみをした蕃婦の憎しみで育ったか……」⁷⁴と、セデック族の征服者に対する憎しみの深さに恐れおののく。そして一言も口を

きかないワリスに対して、次第に「ワリスは、俺を殺す……俺を殺す……殺す……殺す……殺す！」⁷⁵という妄想に取り付かれていき、遂に眼前を行くワリスを銃剣で突き殺してしまう。ここでこの「樹霊」という物語は唐突に終わり、烏丸が「蕃地」に抱いた夢も一瞬にして儚くも潰えてしまうのである。

以上見てきたように、「樹霊」は2つの位相の物語からなっているが、この2つの物語には通底するテーマがある。坂口は「樹霊」において、セデック族の生き残りが日本人警官を凶らずも殺め、今度は逆に日本人警官が先住民を誤解から殺めてしまう、というシンメトリカルな対置構造によって、すなわち霧社事件の後の「2つの死」を通して、征服者日本人と被征服者台湾先住民両者の疑心暗鬼と深い禍根を残したままの関係を表現しようとしたのではないか。そうした日本人とセデック族のいわば相剋の関係が、「樹霊」の全体を通して浮き彫りにされているといえるだろう。これこそ作者が「樹霊」を通して描き出そうとしたテーマだったのである。

坂口の以前の作品にこうしたテーマが見られないわけではない。それは「蕃地」におけるフミと日本人青年牧の関係に見ることができる。牧は霧社事件殉難碑の前でフミと関係を持ち、フミは懐妊する。フミは霧社事件の時「蕃刀」をもって戦闘に参加していった父の姿を覚えている。牧に犯された後、フミは霧社事件のことや父のことを思い出しながら、「内地人とタイヤルは、何時も、何方かが相手を傷つける」⁷⁶と純に語るのである。このように、坂口は1953年に書いた「蕃地」のころからすでにこのテーマに関心をもっていて、それが「樹霊」で前景化されて表現されたに違いない。そして、「樹霊」で表現されたセデックと日本人の相剋というテーマは、川中島への集団移住という題材とともに、その後書かれることとなる「蕃婦ロポウの話」にほとんどそのまま引き継がれ、より綿密に物語化されていった。

霧社事件はともすれば、決死の覚悟でのぞむ勇ましき男たちの壮絶な戦いとして描かれ、表現される傾向にあるが、その禍根はガヤ（セデックの掟、規範）によって武器をとれない女と子供にむしろ深く残った。坂口は事件後に残された女と子供たちの集団移住、すなわち男たちの「闘いの後」を中心に描き出すことで、霧社事件が少数民族に残した傷痕の深さと、セデックと日本人の間の猜疑や矛盾を含んだ複雑な感情を浮き彫りにすることに成功したのである。

結語

本稿は坂口櫛子の作家生涯を整理し直したうえで、彼女が戦中戦後を通して描き続けた「蕃地小説」の系譜を、「時計草」と「蕃地」、未発表作「樹霊」他数編の作品及び「創作ノート」を通して追究してきた。坂口は1938年に初めて訪れた霧社で下山一と出会ったのをきっかけとして、「蕃地」に興味を抱き、「時計草」を執筆した。しかしその時彼女はまだ「蕃地」や霧社事件の実態をよく理解していなかったため、小説の舞台を自身が熟知する故郷に設定するほかなかった。終戦をはさんで10ヵ月間、霧社から移住してきたセデック族が暮らす「蕃地」中原に疎開した坂口は、大石フミや中西サツキら先住民女性と親交を深め、時に霧社事件の生き残りの移住地川中島まで足を運び、「蕃地」を肌で感じ取り、セデック族のガヤやウツフ（祖霊。靈魂が「祖

霊」に帰すと信じる伝統的信念)を崇める信仰を知り、ガヤに深く根付いた彼らの行動、思考様式を理解するようになっていく⁷⁷。坂口は、このような「蕃地」体験において霧社事件に強く惹かれ始め、井戸端で生まれた女達の余話から創作のヒントを得ていった。戦後、坂口はこうしたこぼれ話や小さなエピソードを掻き集め、虚実を混淆させながら、自身の「蕃地」表象を改めて小説として織り直していった。本稿での考察を通して、坂口の「蕃地」疎開が自身のその後の創作を見通した、作家の半ば主体的な行動であったことが指摘できる。彼女は「蕃地」疎開に、「時計草」で描き得なかった「蕃地」の表象を補うための積極的な意義を見だしていた。だからこそ、坂口の「蕃地」創作には、戦中と戦後の緊密な連続性が認められるのである。

一方で「「蕃地」に関するノート」で見たように、1951年から霧社事件を学び直し、人物関係を整理することで「蕃地小説」の構想を練っていたことが確認された。このノートに書かれた内容の一部が「蕃地小説」を支える骨格となり、中原での実体験とそこで出会った人物がモデルとなりモチーフとなって、坂口の戦後の「蕃地小説」群が生成されていったのだと考えられるのである。

日本人とセデック族の間にもともと存在していた愛憎や憧憬あるいは猜疑といった複雑な感情が、霧社事件を禍根としていっそう増幅し、それが払拭されないままにふたたび新たな悲劇が引き起こされる。坂口はこうした征服者と被征服者の間の常に互いを傷つけあう相剋の関係を、「樹霊」のなかで見事に描き出していた。そして男たちの闘いの後も消えずに残った日本とセデック両者の相剋というこの新たなテーマは、戦後の代表作「蕃婦口ボウの話」に引き継がれるかたちで結実して、坂口の「蕃地小説」は1つの極点に到達したのだと考えられるのである。

最後に、終戦を境界とした坂口自身の心境の変化は、戦中戦後を貫くように書かれた「蕃地」小説の生成に、どのように影響したのかについて考えてみたい。坂口は「私は、彼らに、故郷の人々に抱くと同じような愛情をもっている。そしてまた、それよりも深く罪を意識している」⁷⁸と記しているが、彼女のこうした罪の意識は、たとえば小説「蕃地」における日本の父の否定的な描き方や、日本とタイヤルの混血である純の「蕃社」への歩みという形で表出してきたのだろう。

同時に、坂口は戦後、「蕃地」を懐かしい故郷のように描き出すようになっていった。「私は、台湾に移り住んで、はじめて郷愁を心底から感じていた」⁷⁹と初めて「蕃地」を訪れた時の印象を語っているように、時に彼女は「蕃地」やそこで知り合った大石フミなどの先住民を、故郷八代や家族と二重写しにして見ている。このように、坂口禰子の戦後の「蕃地小説」には、戦中に「帝国の臣民」として生きた作家の罪の意識が見え隠れし、また台湾「蕃地」を遠い故郷のように慕う愛情が混在してもいるのである。

注

- 1 年譜に、垂水千恵「坂口禰子・その人と作品——日本統治期の台湾に於ける日本語文学事情——」（『日中言語文化比較研究』第2号、1993年）の「坂口禰子年譜（附録資料）」、中島利郎編『日本統治期台湾文学 日本人作家作品集』第5巻（緑蔭書房、1998年）の「坂口禰子著作年譜（戦前）」がある。
- 2 復刻刊行したものに、黒川創編『（外地）の日本語文学選 南方・南洋／台湾』（新宿書房、1996年）、前掲『日

本統治期台湾文学』第5巻、坂口禰子、河原功監修『鄭一家／曙光』（ゆまに書房、2001年）がある。

- 3 この時期の主な論攷に、垂水千恵「台湾文壇の中の日本人——坂口禰子と台湾作家——」（垂水千恵『台湾の日本語文学——日本統治期の作家たち——』五柳書房、1995年）、中島利郎「坂口禰子作品解説」（前掲『日本統治期台湾文学』第5巻）などがある。
- 4 中島利郎、垂水千恵、大原美智、黒川創らがインタビューを実施し、垂水千恵は「坂口禰子インタビュー——台中と台湾の人々——」（『日中言語文化比較研究会』第3号、1993年）に、大原美智は「坂口禰子研究——日人作家的台湾経験——」（国立成功大学歴史研究所修士論文、1997年）の「付録三」に「問一答」の「訪問録」（96～116頁）を残している。この時期の坂口の一部の言説には混乱がみられる。長男拓史氏によれば、坂口には60代後半から認知症の兆候がみられたという（2015年3月17日取材時）。とすれば、この時期の坂口の一部の言説に対しては慎重な見極めが必要となってくる。
- 5 間ふさ子の「内なる自己を照らす「故郷」——坂口禰子の文学における台湾と九州——」（岩佐昌暉編『中国現代文学と九州』九州大学出版会、2005年）がある。間は坂口の戦中から戦後までを見通して、坂口の「蕃地」ものと1960年代以降に書かれた「九州」ものに相通じる根があることを指摘した。
- 6 「蕃地」は日本統治期に用いられた台湾山地先住民が暮らす土地の呼称である。「蕃」の字は「野蛮な」、「未開の」などの差別的ニュアンスに通じ、今日では用いることはできない。しかし坂口は、「蕃地」といった表現を「私にとってそれは、東京の練馬、大阪の新地というような、固有名詞である。しかも私は、『蕃地』という時、『ふるさと』といっているような、なつかしさを心にぬくくたたえている」（坂口禰子「「蕃地」との関り」、坂口禰子『霧社』コルベ出版、1978年、238頁）と捉えている。本稿では坂口の生きた時代と作品の成立した時代背景を考察することを目的とするため、また前述したような作者の認識を尊重して「蕃」の字をそのまま用いることがある。
- 7 日本文学に描かれた霧社事件を考察した主な論攷に、尾崎秀樹「霧社事件と文学——続・植民地文学の傷痕——」（『思想』第548号、1970年）、河原功「日本文学に現われた霧社蜂起事件」（戴國輝編『台湾霧社蜂起事件——研究と資料——』社会思想社、1981年）がある。坂口の台湾時代を考察した論攷に、星名宏修「血液の政治学——台湾『皇民期文学』を読む——」（『日本東洋文化論集』第7号、2001年）がある。
- 8 これらの資料や未発表原稿は坂口禰子の長男坂口拓史氏（1942年～）の所有する坂口の遺品の中から、筆者が発見したものである。発表、掲載に際しては坂口拓史氏の承諾を得た。
- 9 坂口禰子、前掲「「蕃地」との関り」、246頁。
- 10 1931年熊本第二師範学校卒業、熊本多良木の黒肥地尋常高等小学校などでの勤務を経て、1938年から台湾に渡り台中州田中公学校に勤務した。渡台後、妻キヨと2人の娘と員林郡田中街に住み、自宅に『龍燈』の台湾支部を設けた。その後1940年に永興公学校に、1941年からは明治国民学校に訓導として1944年まで勤めた。
- 11 『台湾総督府及所属官署職員録』（「台湾総督府職員録系統」<http://who.ith.sinica.edu.tw/mpView.action> 2015年1月17日閲覧）に掲載された昭和13年時の北斗公学校の教員に「訓導」の松浦さかゑの名が確認できる。このことから坂口のいう「松浦」とは「松浦さかゑ」であると判断した。
- 12 坂口は『鄭一家』（清水書店、1943年）の「あとがき」に、台湾に渡った後すぐ夫貴敏が「何か書いてみるようにすすめた。私は幾つかの習作をした。主人が田中保男に送った。……私は最初は主人に、その後は雑誌関係の方々によって、手をとられて此处まで歩いて来たようなものである。……私を、此度迄育てて下さった、田中保男氏、植田富士太郎氏、張文環氏に対して、心から感謝を捧げたい」（293-294頁）と記している。
- 13 田中保男と中部文化人の関係については陳淑容「戦争前期台湾文学場域的形成與発展——以報紙文芸欄為中心（1937-40）——」（国立成功大学博士論文、2009年）に詳しい。ただし田中と坂口貴敏及び禰子との関係については触れられていない。
- 14 垂水は、前掲論文「台湾文壇の中の日本人」で、2篇の「時計草」の異同について、作者への質問などをもとに分析した結果、「現時点での私の感触としては、『質問表』に対する回答の具体性から見て、「時一」と「時二」の間には、根本的なプロットの改変はなかったのではないかと思う」（144頁）としている。
- 15 坂口は、この時の楊逵とのやりとりに繰り返し言及しているが、本稿で新しい資料として提示できるのは、「スタンド 秋のひと」（『熊本日日新聞』1958年10月31日）である。「秋のひと」の中で、坂口は、「彼（楊逵）は戦争の敗北を予言し、蕃地へ疎開するようそそのかし『無形の財宝を身につけて帰るべきだ』と言った。蕃地のルポルタージュを書け、といったのは彼なのだ」と書いている。
- 16 セデック族（Seediq）は2008年4月に台湾政府の民族認定を受け、正式な民族名称を獲得した。日本統治期及び光復後の長い間、今日のセデック族はタイヤル族に組み入れられていた。坂口は霧社事件に関与したセデック族のことをタイヤル族の中の「セイダッカダヤ（霧社蕃）」として認識しているが、作品中では彼らの

- ことを総じて「タイヤル」及び「タイヤル族」と呼んでいる。本稿では「セデック」及び「セデック族」を用いた。また、「社」とは現在の台湾山地における「部落」を指す歴史用語である。
- 17 オピン・タダオ（1914～96年）はホーゴ社頭目タダオ・ノーカンの長女で、霧社尋常小学校と埔里尋常小学校高等科で学ぶ中で日本化の洗礼を受け、当局の命令で1929年10月に花岡二郎（ダッキス・ノービン）と結婚したが、花岡二郎は翌年の霧社事件で亡くなってしまふ。事件後は川中島へ強制移住させられ、1932年の元旦にホーゴ社出身の中山清と再婚した。1943年には台湾乙種医師試験に合格して中原診療所の公医となった夫に従って、息子初男（花岡二郎との子）、娘清子とともに中原に移り住んだ。中国名は高彩雲。
 - 18 坂口禰子、前掲「『蕃地』との関り」、272頁。
 - 19 中原接収の日、坂口は日本側の関係者とともに整列し、国民党軍憲兵の点検を受けた。同上「『蕃地』との関り」、282-284頁参照。
 - 20 未発表原稿だと思われる坂口禰子「不貞」の表紙には、丹羽文雄直筆の次のようなコメントが見える。「二作品とも及第ですが、もう一息苦勞してみして下さい。文学者の同人として発表したらどうですか。丹」。
 - 21 小堀周二監修『熊本放送10年史』熊本放送、1964年、87頁。
 - 22 吉村滋「坂口禰子さんを悼む」『熊本日日新聞』2007年2月24日。
 - 23 霧社事件の概略については、前掲『台湾霧社蜂起事件』、『台湾学会報』（第12号、2010年5月）の特集「台湾原住民族にとっての霧社事件」の各論攷、ピボワリス〔加藤実編訳〕『霧社緋桜の狂い咲き—虐殺事件生き残りの証言—』（教文館、1988年）を参照してまとめた。
 - 24 下山一自述・下山操子訳『流転家族—泰雅公主媽媽、日本警察爸爸和我的故事—』（台北、遠流、2011年）を参考にしてまとめた。
 - 25 坂口禰子、前掲「『蕃地』との関り」、248-249頁。
 - 26 星名は、前掲論文「血液の政治学」で、坂口の優生学的な発想は「破壊」、「鄭一家」、「曙光」（『台湾文学』第3巻第3号、1943年）、「時計草」といった戦中の作品からだけではなく、戦後に書かれた「蕃地」などの作品からも読みとれることを指摘している。
 - 27 坂口禰子「母の像」2部、『花泉』1972年6月号、34頁。
 - 28 河原、前掲論文「日本文学に現われた霧社蜂起事件」、194頁。
 - 29 坂口禰子「一九四五年の彼ら—霧社の思い出—」『中国』第69号、1969年、41頁。
 - 30 警察駐在所は現在の中原派出所の敷地に、蕃童教育所は現在の互助国民小学校敷地の東側にあった。坂口の住んだ教員宿舎と中山清の衛生所は駐在所の一段上に位置し、大石フミの自宅は派出所の東隣の第5班集落にあった。教員宿舎と衛生所のあった場所は現在荒地になっている。（2014年9月8日の現地調査時点）。
 - 31 簡鴻模・依婉 貝林『中原部落生命史』（台北、永望文化出版、2003年）及び簡鴻模・依婉 貝林・郭明正『清流部落生命史』（台北、永望文化出版、2002年）を参照した。
 - 32 坂口禰子、前掲「一九四五年の彼ら」、41-42頁。
 - 33 坂口禰子「蕃地作者のメモ」『文学者』第4巻第4号、1961年、92頁。
 - 34 坂口禰子「蕃地と終戦」『日本談義』復刊第57号、1955年、63頁。
 - 35 同上、63頁。
 - 36 坂口禰子「タダオ・モーナの死」（坂口禰子『蕃社の譜』コルベ出版、1978年、145-146頁）の序詞を参照。
 - 37 ピボワリス（中山清）は、前掲書『霧社緋桜の狂い咲き』の中で、「漸く落ち着いた頃 即ち十月十五日の帰順式で又も三十一人逮捕投獄されたので部落民は内心非常に疑懼した」（155頁）と記している。
 - 38 中原の住民 Siyac Nabu は、「住民の反対はろうごくに入れられその中のウカンナウイはごく死して居る」と記している。Siyac Nabu（高明徳）「歴史的事実應該要流伝」（前掲、『中原部落生命史』）、6頁。筆者が2014年9月8日に中原で行った現地調査でも、アウイ・ナウイ（1932年～。日本名 田代マサ子）から同様の証言を得た。
 - 39 郭明正（Dakis Pawan）『又見真相—賽徳克族與霧社事件—』台北、遠流、2012年、225頁。訳は引用者。
 - 40 中村ふじゑは1986年夏にオピン・タダオと中原を訪れた際、オピンから「あれが、作家の坂口禰子さんが住んでいた家よ」と教えられている（中村ふじゑ『オピンの伝言—タイヤルの森をゆるがせた台湾・霧社事件—』梨の木舎、2000年、168頁）。
 - 41 坂口禰子、前掲「一九四五年の彼ら」、43頁。
 - 42 高彩雲、高永清記「永別の悲劇」（前掲書『霧社緋桜の狂い咲き』）を参照した。
 - 43 坂口禰子、前掲「蕃地作者のメモ」、94頁。
 - 44 坂口禰子、前掲「一九四五年の彼ら」、42頁。

- 45 坂口禰子、前掲「蕃地作者のメモ」、94 頁。
- 46 坂口禰子、前掲「一九四五年の彼ら」、47 頁。
- 47 坂口禰子、前掲「蕃地作者のメモ」、94 頁。
- 48 前掲書『台湾霧社蜂起事件』、411 頁。
- 49 坂口禰子「母の像」2 部、『花泉』1971 年 6 月号、37 頁。
- 50 同上。
- 51 坂口禰子「ピッキの話」、坂口禰子『蕃地』新潮社、1954 年、77 頁。強調は引用者。
- 52 坂口禰子、前掲「“蕃地”との関り」、277 頁。
- 53 坂口禰子、前掲「一九四五年の彼ら一」、46 頁。
- 54 坂口禰子「蕃地」『蕃地』新潮社、1954 年、46 頁。
- 55 坂口禰子「蕃婦ロボウの話」『詩と真実』第 139 号、1960 年、39 頁。
- 56 坂口禰子、前掲「“蕃地”との関り」、275 頁。
- 57 坂口禰子、前掲「蕃婦ロボウの話」、28 頁。
- 58 坂口禰子、前掲「“蕃地”との関り」、274-275 頁を参照した。
- 59 坂口禰子「事実と真実」(『詩と真実』第 130 号、1960 年 2 月)を参照した。
- 60 坂口禰子「スタンド 素材の燃焼」(『熊本日日新聞』1960 年 3 月 15 日)。
- 61 頁数は書き込みのある頁順に筆者が便宜上加えたものである。
- 62 坂口禰子、前掲「蕃婦ロボウの話」、30-31 頁。強調は引用者。
- 63 坂口禰子、前掲「『蕃地』に関するノート」、12 頁。
- 64 坂口禰子、前掲「蕃地」、10 頁。
- 65 管見の限り、原稿「樹霊」は未発表の作品である。400 字詰め原稿用紙 34 枚に渡って執筆された 1 万 3000 字ほどの中編小説で、表紙がつけられ紙紐でしっかり閉じられている完全原稿であることから、習作ではなく発表のために準備された作品だということがわかる。原稿用紙最終頁の裏には「八代市東松江城町 坂口禰子」と記されている。坂口が貴敏の死後、拓史と耕史とともに本住所で暮らしたのは 1957 年春から 59 年春の約 2 年間であることから、本作はこの期間に執筆されたものと推定できる。1957 年は夫の死による失意から立ち直れず創作から離れていたため、私見では 1958 年から 59 年の間の作品だと考えられる。頁数は原稿用紙の上中央に振られている番号を記した。
- 66 坂口禰子「スタンド 春ふたたび」(『熊本日日新聞』1960 年 3 月 27 日)。
- 67 坂口は、同上「春ふたたび」の中で、この時期に書けなかった原因を「私の原稿料をあてにした夫の放とう三まいの生活で崩壊しようとする家庭を懸命に支えることに疲れたこと」と記している。
- 68 同上「春ふたたび」。
- 69 坂口禰子、未発表原稿「樹霊」、5 頁。
- 70 同上、6 頁。
- 71 同上、13 頁。
- 72 同上、19 頁。
- 73 同上、33-34 頁。
- 74 同上、34 頁。
- 75 同上、34 頁。
- 76 坂口禰子、前掲「蕃地」、37 頁。
- 77 セデック族の信仰・文化風習などは、特に「蕃地の女——ルピの話」で色濃く描かれた。
- 78 坂口禰子、前掲「蕃地作者のメモ」、94 頁。
- 79 坂口禰子、前掲「“蕃地”との関り」、264 頁。

(2014 年 10 月 18 日投稿受理、2015 年 3 月 4 日採用決定)

【付記】

本研究は熊本学園大学の学術研究助成 (2014 年度) を受けた。